

ニューヨーク事務所

都市部向け、地方向けと、現状にあわせた企画好評

日本の現代文学の魅力を全米各地の幅広い人々に紹介する目的で、作家の角田光代氏を招へいし、ニューヨークおよびシアトルにて講演・朗読会を実施しました。会場となった各地の大学、書店、読書クラブでは、参加者との間で活発な意見交換が行われました。また、日本文化に触れる機会の少ない地方向けには、中西部7大学巡回映画上映会を実施、各地で好評を博しました。

公演については、Performing Arts Japan(舞台芸術紹介日米共同事業)の事務局として、文楽全米5都市ツアー等6件の巡回公演、笠井勲氏と若手アメリカ人舞踊家とのコラボレーション『Butoh America』等10件の共同創作を支援しました。また、在米日本専門家中南米派遣事業の一環として、米国で活躍する3公演団を含む4つのグループを8カ国12



加藤幸子氏、吉岡愛理氏ブラジル・ペレン公演

都市に派遣しました。

さらに、日本研究米国諮問委員会の事務局業務を担ったほか、米国アジア学会年次総会等国際会議・シンポジウムの機を捉え、日本研究者のネットワーク形成を積極的に支援しました。

ロサンゼルス事務所

観客動員数に顕れた事業成功の大きさ

北米最大の日系人祭り「二世週祭」において、初めて披露された「青森ねぶた祭り」を支援。1万5千名の観衆を集めたこの事業は文化事業だけでなく、日本人と日系人との交流事業としても大きな成功を収める事ができました。秋には全米5都市10公演の文楽公演ツアーをサポートし、ロサンゼルスでの4公演は合計3,280席が満員となりました。また、「文字レクチャー&デモンストレーション」を米国西部5都市で開催。京都大学阿辻哲次教授が漢字の成り立ちの講演、また日米文化会館小阪博一氏が書道の実演を行い、日本語教育と文化紹介を融合した事業を実現しました。春には映画やテレビ衣裳を手がける着物スタイリスト富田伸

明氏を招き、「着物に関する講演と着付けファッションショー」を3都市6公演行いました。「文字」も「着物」もどちらのイベントもロサンゼルス地元テレビ局で特集放映されました。



日本語教育では日 ロサンゼルスで行われたねぶた祭り
本語教師の夏期研修を実施、またオンラインによる日本語教師養成研修システムを実現するために全米日本語教師会連盟との会合を行いました。



Close Up

所長
菅野 貢輝

ロサンゼルス事務所が管轄する地域は、原則として、ロッキー山脈より西の13州となっています。カリフォルニア州内においては、ほとんど毎週のように太鼓、日本舞踊、盆栽、茶道、武道等草の根レベルでの日本文化紹介関連事業が各地で展開されています。特に、ロサンゼルスでは多数の日系コミュニティの方たち(カリフォルニア州→28万9千名、南カリフォルニア地域→17万8千名)が多様な分野で影響力を持って活躍されていますが、ジャ

パンファウンデーションは「日本文化継承」に強い関心をお持ちのこの方たちの潜在力を大事にし、主催による日本文化紹介事業の際にも、考慮に入れて実施しています。また、当事務所の主幹事業として位置づけられている日本語教育振興支援については、全米を対象にすることを念頭に入れながら仕事をしていますが、この広大な国にきめ細やかに網の目を張ることは、簡単なことではありません。従って常日頃から在米日本公館、日本語教師会、日米協会等のご協力を得ながら、可能な限り着実に“複眼的指向”で仕事を行うことに留意しています。この姿勢がとりわけ、学習者層が厚い中等レベルにおける日本語教育の活性化の強固な下支えになることを念じております。

メキシコ事務所

大人から子どもまで 日本の文化にふれる機会を積極的に演出

7月には映画監督今村昌平氏の作品10本の特集上映を国立シネマテークと共催で行い、のべ約3,200名の観客を集めました。また、オルメカ文明に関する遺跡出土品で知られる、ベラクルス州のハラッパ人類学博物館では7月から9月まで伝統陶芸展を開催、日本の優れた伝統美術品をメキシコの地方都市で紹介する貴重な機会を持つことができました。

秋には当地でも著書が出版されている絵本作家の五味太郎氏によるワークショップをメキシコシティとグアダハラ市で実施。同氏の来訪は当地のマスコミからも注目され、参加者の創意を生かしたワークショップは、子どもだけでなく

大人からも好評を得ました。

日本語教育に関しては、メキシコ在住の日本人がボランティアとして日本語の授業に参加して学習者と会話の練習をする「ビジターセッション」を当地の日本語教師会と共同で実施。普段日本人と話せる機会がほとんどない当地の日本語学習者の学習意欲向上に成果をあげました。

このほか、中米地域唯一の海外拠点として、近隣諸国において実施される日本文化紹介事業に協力するため、メキシコ在住の日本文化専門家を派遣する事業も実施しました。



メキシコシティでの五味太郎氏ワークショップ



Close Up

所長
中村 裕二

日本とメキシコとの交流は江戸時代初期に始まると言われています。当時メキシコはスペインの植民地でしたが、1609年にフィリピンとメキシコを結んでいたスペイン船が暴風雨のため千葉県御宿の海岸に座礁。乗り組んでいたメキシコ人らは地元民の救護を受け、徳川幕府は帆船を建造して一行をメキシコに送り返しました。また、1613年に伊達政宗によってローマに派遣された支倉常長の一行は、往復ともにメキシコを経由しました。

その後、日本の鎖国政策により交流は長らく途絶えま

したが、明治維新後の1888年には開国後の日本にとって初めての平等な条約となる日墨修好通商条約が結ばれ、今日まで良好な関係が続いています。アニメやマンガといった日本のポピュラーカルチャーや日本食は、今ではメキシコでも都市部の人々には身近なものとなっています。

2007年はメキシコに日本からの移民が到着してから110周年にあたりました。また、2008年は外交関係樹立120周年、2009年は日本とメキシコの最初の交流(1609年)から400周年にあたります。このように日墨関係において記念すべき年が続くことから、両国関係のさらなる緊密化と交流の拡充を目指して、この数年間はさまざまな文化交流事業を実施していく予定です。

サンパウロ日本文化センター

日本ブラジル交流年 (日本人ブラジル移住百周年) 事業を開始

1908年6月に移民船笠戸丸がサントス港に入港してから100年、2008年は日本ブラジル交流年(日本人ブラジル移住百周年)にあたります。ジャパンファウンデーションでもこの節目の年を記念し、2008年の年明けから各種事業を開始しました。2月から3月にかけては、サンパウロほか計4都市で江戸糸操り人形『結城座』公演およびワークショップを実施。日系人を含むブラジルの多くの人々に日本の伝統文化を再認識してもらうべく、当センターも現地のバックアップに尽力しました。

また、2006年度から継続させてきた『味覚の知恵』連続

講演会企画の一つとして、2007年4月に日本から農学博士の石毛直道氏と伝承料理研究家の奥村彪生氏を招へいしサンパウロほか計3都市でレクチャーデモンストレーションを実施。『味覚の知恵』シリーズは2008年3月まで続きました。

そのほか、日本語スピーチコンテストも例年同様大きな盛り上がりを見せました。日本研究・知的交流分野では、京都国際日本文化研究センターの教授陣を招き、日本の笑いの文化をテーマに講演会を実施しました。



和食のレクチャーデモンストレーション